

動物子育て物語

親と子のきずな

中川志郎



動物子育て物語

親と子のきずな

中川志郎



動物子育て物語

定価 一、一〇〇円

初版第一刷発行 一九七八年五月二六日

著 者 中川志郎

発行者 古川 司

発行所 株式会社 佼成出版社

東京都杉並区和田二一七一（〒一六六）

電話 〇三―三八三―三一五一（代表） 振替 東京七―七六一

印刷所 株式会社 東京印書館

製本所 株式会社 若林製本工場

落丁本、乱丁本はお取り替えいたします。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

© Shiro Nakagawa 1978. Printed in Japan

0045-15003-2245



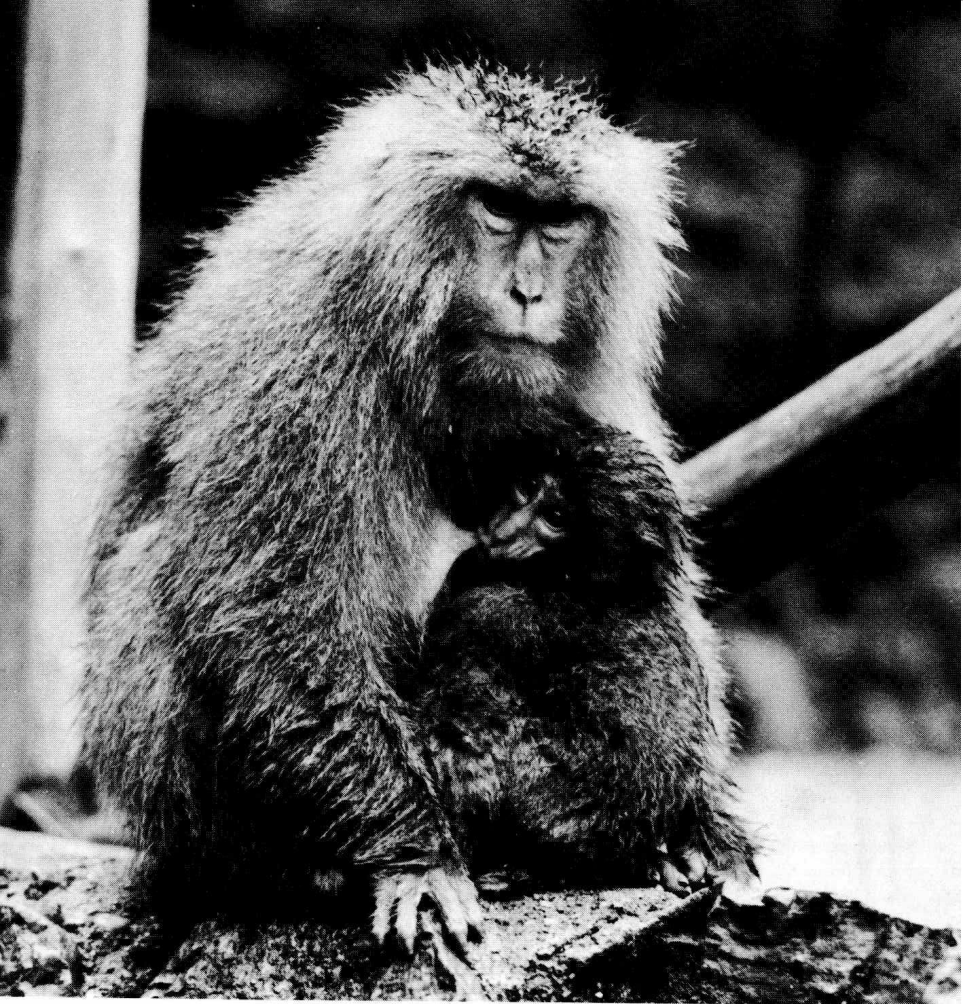
親と子の情景！

子供をなめる——親子関係の形成

多くの哺乳動物は、生まれたばかりの子供を、丹念になめまわす。それには、子供の体表についたよこれをぬぐうという役割もあるが、より大切なのは、この時に、母子の直接的な触れあいが生じるということである。

うまれ出た子供は、子宮という楽園から、はじめて外界に投げ出され、全身的な不安におののいている。この時に、暖かくやさしい肌ざわりの母親の舌でなめられることは、何にもまして豊かなぐさめとなる。

このなめるという行為により、母と子の第一段階のさすなが結ばれるのである。

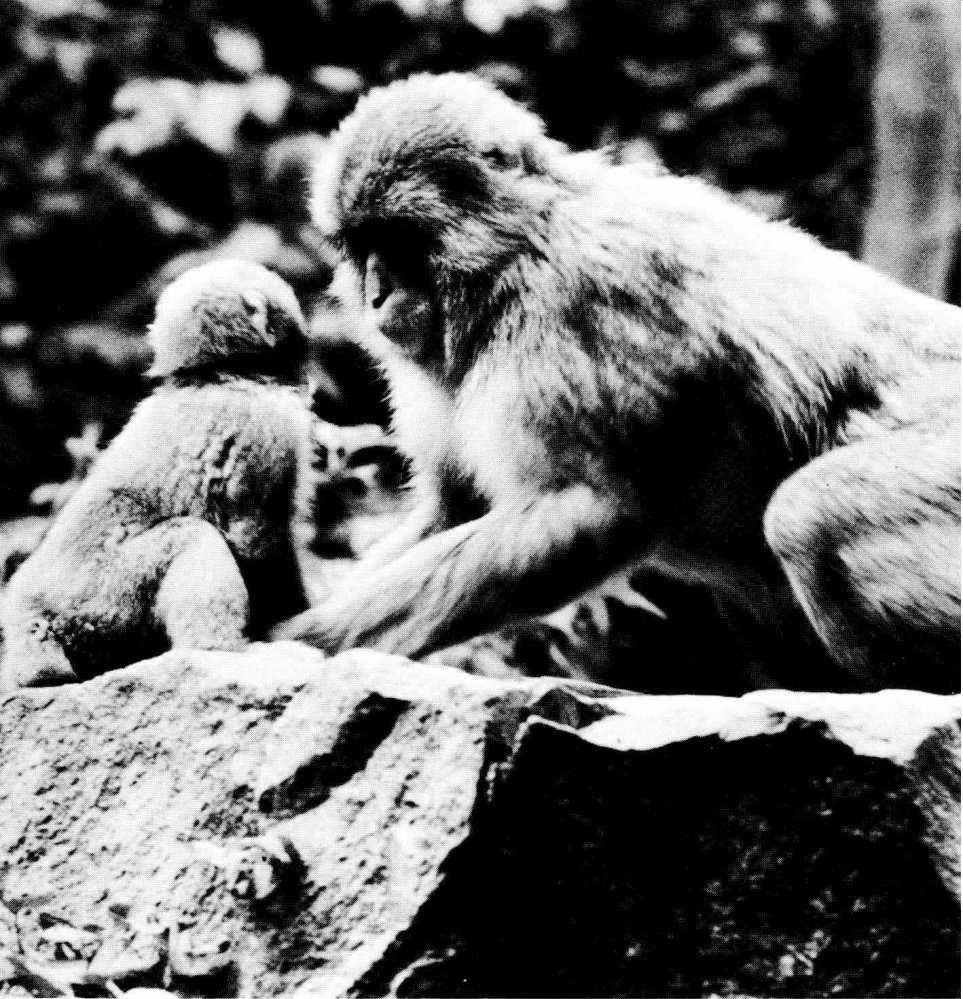


親と子の情景 II

乳をのませる——その限りなく重要な役割

哺乳という行動のうちには、栄養物の供給ということにもまして、重要な役割がある。子供は哺乳に際して、母親のやわらかさとぬくもりを、じかに感じとり、それによって、精神的な安定を得ることができる。

また、母親にとっては、子供との直接的接触が刺激となって、子供を愛さずにはおれないという衝動をたしかめることになる。哺乳という行為は、いわば母と子をつなぐかけ橋なのである。



親と子の情景 Ⅲ
子供を見守る——成長の糧

子供の成長のために、母親の愛はかけがえのないものである。身近に自分を保護してくれるもの（母親）がいるという安心感にさええられていてこそ、子供は、正常な成長をとげることができる。

母親が、何らかの事故でいなくなってしまうサルの場合、子サルはかなり大きくなっても、ほとんどどこへともせず、仲間にもうちとけていくことができない。したがって、母サルの愛を欠いた子サルは、群れ（社会）の正常なメンバーとなることは難しい。

目次

生まれたとたんに墜落するキリン児誕生の瞬間

なげきの母、オランウータン

偏食コアラの不思議な離乳食

生まれたときは２グラムしかないカンガルーの赤ちゃん

オオカミの父は限りなく愛をそそぐ

ふっくら毛だまのカモハクチョウのヒナ

乳の出ない母ザルの愛、悲しく

みごとな水中哺乳、カバの専売特許

黒い悪魔、コビトカバのそっくり親子

母親に抱かれて育つ小さな小さなマレーゲマの子

人工授精児誕生、マナヅルの赤ちゃん

草原の王者、アメリカバイソンの出産

子育てを忘れてしまったアカゲザルの孤独

小さなおヒゲのパタスザルの赤ちゃん

どっしりママにひょうきん息子、インドサイの親子

アシカのママのとび出しオッパイ

オヤッ、オスも抱卵！ ケープペンギンの夫婦愛

ネコ属きつての美しい毛並、オセロットの子の誕生

百獣の王、ライオンのやさしいママ

純白のプリンス、ホッキョクグマの誕生

アメリカダチョウ（レア）の鳥とも思えぬ珍奇なヒナ

巣づくりからひと月余、カンムリヅルの三つ子誕生

出産後、疲れきり、立つこともできぬ母ゾウ

あざやかなシマ模様、アメリカカバクのウリンボウ

ダッコちゃん人形そっくり、ゴリラの赤ちゃん

「白」はかわいさのシンボル、コロブスの赤ちゃん

固い母と子のつながり、ワラビー

黒衣の天使、カワウのヒナ誕生

子供を連れ去られたヒゲマの嘆き

あとがき 動物たちの子育て、そこに真の親と子の姿がある

装丁——横尾忠則

動物子育て物語

● 親と子のきずな

1 生まれたとたんに墜落するキリン児誕生の瞬間

“ズシューン”という音がした。

夜八時、キリンの母親“ネック”が、一児を生みおとしたのである。

それは、まさに生みおとすという形容がぴったりの光景であった。

いつものことだが、キリンは立ったままでお産をする。そのほうが、危険の多い野生の場面では、より安全だからである。

したがって、生まれおちる子キリンは、誕生の瞬間に、地上二メートルの高さから落下することになるのだ。はじめのころ、子キリンがケガをすることをおそれて、動物園では、お産が近づくとも部屋中に切りワラを敷いたものだという。

だが、実際は、こんな手間をかけなくとも子キリンは、ケガなどをする気づかいはない。自然の摂理というものは、よくしたもので、頭から生みおとされるキリンの子は、着地するまでに半回転し、腰からうまく着地するようになっているのである。

それにしても、キリンの子供は、生まれながらにして、体高一八〇センチ、体重七〇キロというのだから、着地の際の衝撃はかなりのものである。

近くで見ている私たちの体にも、そのズシーンという音が、じかにひびいてくるような気がする。そして、おもしろいことに、着地した次の瞬間に、多くの子キリンは、生まれてはじめての呼吸をするのだ。フーッ、という深い呼吸である。

人間の赤ちゃんでも、生まれてから、なかなか呼吸をしないような赤ちゃんに、看護婦さんが、そのお尻を平手でたたくことをするが、キリンは、母なる大地によって、その恵みをうけているのかもしれない。

生みおとされた子キリンは、立ちあがるまでが、また、たいへんである。首が異常に長いうえに、手足がいやにひよろ長いことから、重心のとり方がむずかしいらしく、なかなか起立できない。あと足をふんばって立とうとすると、うしろにこける。それに、長く定まらない首が、あちらにゆらり、こちらにゆらりという始末で、まさに足が地につかないのである。こんな子キリンを母親はじっと見ている。

体をなめ、ひくくうなり、はげますような動作は見られるのだが、子キリンを立たせるために、首や脚で介添えをしてやるようなことはけっしてない。

起立するために、あちらに転び、こちらにのめって、七転八倒の苦しみをしている子キリンを見ると、私たちは、手をかしてやりたくなり、なにもしない母親キリンを、能ない奴などといったりするのだが、じつは、これは、いわれのない中傷のようだ。



生みおとされたキリンの子は、立ちあがるまでがたいへんである。あと足でふんばって立とうとすると、うしろにこける。それに長く定まらない首が、あちらにゆらり、こちらにゆらりという始末で、まさに足が地につかない。そんなわが子を、キリンの母は、じつと見ている。

ある学者の報告によれば、キリンの母親は、むしろ、わざと子キリンの起立に手をかさないのだ、というのである。アフリカの原野、弱肉強食の世界、襲うものと襲われるものがつねに同じ世界に生きる。襲われるものは、いつも、自分の身は自分で守る体と訓練が必要で、だれも頼って生きてゆくことはできないのである。

まさにキリンもその一種である。

自分の力で起立して歩行できるような子キリンでなければ、このきびしい野生の世界を生きぬいていくことはできないことを、母親キリンはよく知っている、というのである。

しかし、この試練に耐えて、起立したキリンの子は、もう自分の身を自分で守る能力を与えられている。その日、子キリンは母親とともに歩み、その翌日は、危険があれば、もう、時速四〇キロのスピードで、母親とともに疾走することができるようである。

逃げるだけが、キリンの生きのこる方法なのだ。あの背の高さを利用しての警戒監視は、ほかのどんな動物よりもすぐれている。

五メートル、あるいは六メートルもの高いところから四方八方の草原を見まわし、危険のないことを確かめてから、ゆっくりと草を喰むのである。

この用心深さをもってしても、時に危険に遭遇することもないわけではない。不意をつかれたときだ。